



大宇陀松山の「森野旧薬園」は、その「旧」の文字が示すように、今は薬園ではない。江戸後期に森野藤助（寛助）が拓いた薬園をそのまま残した、個人所有の「庭」である。薬園としての起源や、寛助の事蹟は1000種もの動植物を彩色で描いた「松山本草」も各り多くの書籍や研究によって、よく知られている。この日本初の民間薬園は、厚みの乏しい近世奈良の歴史にあって、煥然と輝いている。

しかし、より注目すべきは、この「薬園」が明治以降の日本の近代化や西洋化、戦後経済の高成長から長期沈滞といった時代潮流の激変の中で、今なおその命脈を保っていることである。250種にも及ぶ薬草木は、生薬の原料として生産出荷されているわけではない。経済上のメリットは皆無である。それどころか、11000平米もの「薬園」の維持に、毎年多額の経費がかかっている。効果・効率の面から言えば、閉鎖か転用の途しかなない。事実、各地にあった近世の民間薬園は、早々に全滅している。

なぜ、この「森野旧薬園」だけが残ったのか。

享保14（1729）年、幕府から拝領した薬草木6種類の種苗が自宅裏の小山に植えられ、ここから森野薬園が始まった。幕府から下付された薬草木は、享保期だけでも50種に上る。ほとんどは駒橋御薬園の珍種で、貴重な外国産も混じっていた。単なる薬資ではなく、薬草園産物を研究させる狙いもあったのだ。吉宗治政下の当時、輸入薬草が幕府財政を圧迫していた。背景には疫病の大流行があった。寛助はたびたび江戸に下り、学者の相談に乗っていた。寛助にとって薬草の採集と栽培は、自らに課した社会的使命であった。寛助の木像が安置されているお堂の軒裏には、「井当酒箱煮等持参之事」を「堅相断候」とする制札があった。墨痕は薄れ読み取りにくいのが、今も薬園の入り口に掲げられている。この薬園は己が使命を全うするために守るべき「聖域」だったのだ。代々藤助の名を襲る森野家の当主は、この寛助の意思も継いだのである。薬園に関する標本や書籍文書等も、今日まで全て保存継承されている。薬園が「旧薬園」となって残っていること、これが「森野藤助」の真の偉業と言わなければならない。それにしても300年、11代に亘って一人の例外も出なかったのは、「ここに住んでいると、自然にそういう気持ちになるのです」。不思議ですねえと当代の御母堂、恵子さんは微笑み、「松山の人たちに助けられて、ここまで来ました」と続けた。

「森野旧薬園」は国指定の史跡である。それは、グニス・ロキ（地域の光）のよきレガシーの証しでもあるのだろう。しかし、その「光」は永遠不滅というわけにはいかない。個人のお身にもし地域の篤志にも、限界がある。高給の薬園管理者を継ぐ者は、まだ現れていない。地域の光を絶やさないための新しい仕組みが、必要を時期に来ている。

（編集責任者）



森野旧薬園入り口前



森野恵子さん

※現在は資料館で展示中(2016.7末)

【森野旧薬園】奈良県宇陀市大宇陀上新1880 Tel.0745-83-0002 (9:00~17:00)

<http://www.morino-kuzu.com> (「森野吉野寛本舗」)

森野旧薬園

—「森野藤助」の偉業—